多角的な視点を育む国語科教育の方向性に関する考察

～ビブリオバトルと図書室利用からわかったこと～

学籍番号　219303
氏　　名　柏木　洋
主指導教員　池嶋　伸晃
副指導教員　成實　朋子

１．研究の背景

近い将来、外国人労働者の受入れが進み、その家族が日本の社会に根ざすようになった時には、外国にルーツを持つ生徒の数は更に増加すると予想される。その子どもたちが日本の学校教育を受ける場合、まず言葉の壁にぶつかることになる。そこで 1 つの疑問が浮かんだ。外国にルーツを持つ生徒は日本の学校で果たして国語科の授業が理解できるのであろうか。また多くの日本人生徒はその子ども達の困り事に理解が及ぶだろうか。私は国語の教員免許を持つと同時に日本語教師の資格も持つ。2 つの立場から多様な言語文化背景をもつ生徒に対する国語の授業はどうあるべきなのか研究したいと考えるようになった。

そして「多文化共生社会をめざした国語科教育の方向性に関する考察―多様な言語文化背景を持つ生徒に対する国語科授業の構築―」というテーマで研究を進めた

文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和 3 年度）」によると、日本語指導が必要な児童生徒は 58307 人で、調査を始めた平成 20 年度は 33470 人で、25000 人以上増加している。

日本語指導が必要な中学生等の進路状況の調査では、高等学校等への進学率は 89.9％であった（全中学生等の進学率 99.2％）。

研究当初は、授業研究や教材研究を重ね、外国にルーツのある児童生徒に向けて、どのように国語科授業を構築するか、ということを研究テーマにし、通常学級に入り授業を受けやすくすることを目的としていた。

しかし、学校実習の現場では想定する外国にルーツのある児童生徒はいなかった。

そのため途中から、外国にルーツのある児童生徒がいると想定しつつ、研究テーマを「多角的な視点を育む国語科教育の方向性に関する考察～ビブリオバトルと図書室利用からわかったこと～」として、研究を進めていく方針に舵を切った。

2 実習での取り組みについて

本教育実践研究の目的は、多角的な視点を育むことを目的とし、国語科としてどのようなアプローチが出来るのか考察したい。

多角的な視点とは、自分の視点だけでなく他者の視点に立って物事を考えることを指す。

図書室で授業をすると普段、点数が取れない、集中力のない生徒が意欲的に取り組むという変化に気付いた。図書室という場所に馴染むことによって、本を全く読まなかった生徒が、本を借りるようになった。図書室で授業を受けることが新鮮で楽しいという意見を多く聞くことが出来た。また、学力が厳しい生徒であっても、授業を意欲的に受けるきっかけになり得る。このことから、図書室を利用することで読書を推進し、学力不振の生徒を救うきっかけになり得ると考えた。ビブリオバトルや図書室利用を通して、読書数が増え、発表が苦手な生徒であっても、本という媒体を通すことにより、本の魅力を伝えることが出来た。

3 実習を通して分かったこと

実習校で、ビブリオバトルをしていく中で、教室での授業と、図書室での授業に生徒の集中力の差を感じた。少し難しい問題に取り組む際に、教室だとすぐに諦めるような生徒でも図書室の環境だと、隣の人に気軽に聞ける状態で、取り組んでいる様子が多くみられた。

実際に図書室に関連するアンケートを行ったところ図書室には肯定的な意見が多いが、放っておいても来る場所ではないことが分かった。

授業で活用することにより、書棚に興味を向けさせることが出来る。図書室の場が持つ可能性に着目していきたい。

4.　今後の展望

今回の実習で、図書室を利用することに大きな可能性を感じた。本に囲まれて授業をすることにより、教室以上に話し合いが活発化したり、本の貸し借りがしやすくなったり、メリットを強く感じた。これからも先行研究などを参考に

しながら考え、図書室をただ利用するだけでなく、司書教諭と連携して読書推進を行い、読書を自発的に行うためにどのようにアプローチをすればいいかなどを研究し、図書室利用の更なる可能性を広げていきたい。